

都市公共政策ワークショップⅡ 議事録

日時：2013年10月4日（金）18時30分～20時20分

講師：宝塚市立中央図書館 坊則正館長 藤野高司係長

担当教員：久末弥生先生

文化のまちの図書館運営

～サービスする側から見た図書館～

宝塚市の概要とイメージ

・緑が豊か ・花のみち（大正時代からの宝塚の象徴、宝塚大劇場前） ・市立手塚治虫記念館（手塚治虫が5歳から24歳まで過ごしていた街） ・清荒神清澄寺（火の神、カマド（台所）の神） ・中山寺（安産祈願） ・宝塚歌劇 ・阪神競馬場 ・ベガホール（音楽ホール） ・文化の香りが漂う芸術の街 ・観光都市 ・良好な住宅都市 ・由緒ある数件の温泉旅館 ・宝塚ファミリーランド（市街地の中心） ・年間の観光客が1000万人を超えていた（昭和48年は1290万人を記録） ・阪神間に位置し住みやすい ・街のイメージが良く思われている ・現在の観光客は約850万人に減少 ・街のイメージの過大評価（イメージの良さが先行し過ぎている） ・人口約23万人の特例市 ・面積約100km²（3/4が山間部） ・急激な人口増加 ・昭和51年以降の4年間で小中学校合わせて13校建設（財政負担増加、当時人口16万人） ・駅ごとの再開発事業（現在まで6カ所完成）

宝塚市の図書館の歴史

- 昭和43年（1968年）市民会館に図書室、自動車文庫の巡回サービス、のちに公民館に図書室を移動。
- 昭和55年（1980年10月）阪急電車の清荒神の駅前に現在の中央図書館開館し、注目を集める。

宝塚市の図書館について

- イメージ通りの普通の公共図書館である。
- 図書館数は多くはないが、貸出冊数は多い。
- 市民の半数が図書館を利用したことがある（実体験も含めた推定）。過去3年間で利用経験がある人は20～30%。
- 市民の10%（約2万人）は、毎月1回以上利用する。
- 中央図書館の来場者数は、少ない日で1日500人、多い日であれば1日1,000人を超える。
- 中央図書館、西図書館、中山台分室、山本南分室、移動図書館（25カ所のサービスポイ

ント、2週間に1回)⇒本市と同規模の自治体と比較すると、図書館数は半数にも満たない。

- 中央図書館、西図書館とも駅から近い。
- 中央図書館ではギャラリー（聖光文庫）を展開。建物の外観が美しいと言われることもある。
- 美術、芸術に関する多数の専門書を聖光文庫に所蔵。⇒他市図書館との差別化
- 聖光文庫の蔵書は、清荒神清澄寺の境内にある鉄斎美術館の入館料により購入された図書の寄贈を受けて構成している。
- 平成3年（1991年）より、図書館の広域利用システムを導入。阪神7市1町（尼崎市・西宮市・芦屋市・伊丹市・宝塚市・川西市・三田市・猪名川町）の住民はエリア内のすべての図書館を利用できる。
- 目標値⇒市民登録率（図書館利用者登録者数）30%、貸出密度（市民1人当たりの貸出冊数）8冊
- 平成24年度実績⇒市民登録率23.8%、貸出密度8.4冊
- 正規司書職員数14名、蔵書数約63万冊、年間総貸出冊数193万冊、貸出人数58万6,000人、年間資料購入費3700万円、年間行事回数500回、利用券登録者数5万8,600人
- 他市や本市教育委員会の事業評価において高い評価を得ている。
- 図書館利用者満足度調査等のアンケート調査においても、8割以上の利用者が満足を得ている、という結果が出ている。
- 公共施設の有効活用への取り組み
- 図書館の返却システム確立への取り組み
- 本市の図書館の現状を踏まえた各関係機関との連携の重要性（特に学校図書館との連携）
- 平成20年、西図書館に指定管理者制度の導入を検討するようにとの提言を受け、図書館内・教育委員会にて多くの議論を重ね、自治体直営運営が望ましいとの結論から現在に至る。
- 指定管理者制度にはコストカット（開館時間の延長による人件費等）の面で対抗できない分、自治体直営で運営することによる質の向上を目指す。
- 職員が日々研鑽を重ねながら自己の資質向上に取り組む。⇒職員による確実な情報提供。利用者に新しい発見や喜び、満足感や充実感が生まれ、それが自己の成長に繋がっていると実感してもらうことができるような、魅力ある図書館の運営を目指す。

宝塚市立図書館の最近のイベント例

- ぬいぐるみの図書館おとまり会 平成24年12月8日（土）

平成22年12月の第1回以来、ご好評をいただいている行事であり、子どもたちのぬいぐるみを図書館にお泊りさせる企画である。18時の閉館後に子どもたちがぬいぐるみと一緒におはなし会を楽しんだ後、ぬいぐるみだけ図書館でお泊りする。閉館後の図書館で、ぬいぐるみが探検する様子を職員が写し、その写真を翌日ぬいぐるみを迎えに来てくれた

子どもたちにプレゼント。また、ぬいぐるみが読んだ絵本も紹介、貸出する。この企画は新聞に掲載されたこともあり図書館のPRになった。現在は、全国何十カ所で行われている企画である。

●『朗読なずな』による朗読劇「杉山平一さんの文学と人生」 平成24年12月9日(日)
西公民館(音楽室)において、同年5月19日に逝去された宝塚市在住の詩人、杉山平一氏を偲んで、その文学と人生を、西図書館で活動するグループ『朗読なずな』の皆さんによる朗読劇にて公演した。

●甲山山頂図書館に行こう！ 平成25年4月21日(日)
甲山の山頂にテントの図書館を作り、子どもたちと本の貸出、ブックトーク、山岳ガイドさんによる楽しい自然体験遊び。山頂にて図書の貸出を行った。

他都道府県での年間貸出数

- 1位 滋賀県9冊の年間貸出密度…人口は少ないが、図書館が充実していることで有名。
- 2位 東京都全体で1億の年間貸出冊数…人口も多いが、図書館もたくさんあることで有名(例えば、文京区では、区の面積11.3km²に11の図書館がある)。(9位大阪府、12位兵庫県で5、6冊の年間貸出密度である)

図書館とはどんな場所か

この1年以内に地元の市町村立の図書館に行った頻度の調査(本受講生調査、会場約20人)。

- ・月に1回は行く…4人
- ・2カ月に1回…1人
- ・3カ月に1回…2人
- ・6カ月に1回…4人

・他の人はこの1年間全く図書館に行っていない人

●上記は、図書館利用者の平均的な(想定通りの)数値とあまり違ってない。

●本や勉強が好きでも行けない人も行かない人もいると考えられる。

●図書館は本好き(小説、フィクション好き)の人が行く場所である、というイメージを持っている人もいると考えられる(実際は、貸出冊数に占める小説の割合は通常約30%しかなく、小説好きでない人もたくさん図書館を利用している)。

●貸出冊数に占める70%は、料理・裁縫・育児・インテリア、病気・健康法、旅行ガイド、お金儲け・ビジネス、趣味(多様なジャンル)等の本である。

●しかしながら、全国の読書世論調査(毎日新聞により毎年調査)によると、40~50%の人が小説を借りたことがある、という数値が記録されている。

●本当の小説好きな人は、図書館の利用頻度がかなり高い。

●博物館、美術館、公民館などの公共施設と比べると、図書館は通常、遠方の人が利用す

る施設ではないと考えられる（本を借りることが大きな目的であるため、返却しやすい場所ではなければならない）。

- 本来、地元市民が繰り返し利用する“私の図書館”的な地域密着型の施設である（お馴染みさん）。
- 近年、特に都市部の図書館では、平日は60歳以上の男性に多く利用されており、長時間滞在される方も多い（以前は、どちらかというと短時間利用が多く、女性の方が多い印象であった）。
- 休日は、家族連れの人割合が増える。10年ほど前からの変化として、父子だけ（お母さんは来ない）で利用する割合がかなり増加している。イクメン傾向の現われと思われる。父子利用者は、平日遅い時間帯でも見られ、楽しんで利用されている。
- 博物館、美術館、公民館などの公共施設と比べ、図書館は他の人に迷惑をかけなければ何をしてもいい場所である（特に目的がなくても時間を過ごせる場所となっている）。
- 職員は利用者の期待に応える姿勢である。⇒運営内容がニーズによって変化している（例：リクエスト制度…蔵書でない本にも予約できる制度⇒新たに購入⇒地域・利用者によって蔵書のジャンルに差が出てくる）。

インターネット等を活用した便利な利用形態

- 図書館で過ごす時間を楽しむ利用形態とは対照的に本をインターネットで予約し、その本を取りに来てすぐに帰るといった利用形態もある。
- 在庫図書への予約については、その図書を本棚から取り出し貸出しできるように準備する作業が必要で大きな労力をかけているが、人と本との出会いを作り出すための重要な作業である。
- 利用者の利便性を考えると受取場所と返却場所を多くすることが重要なので、コンビニや宅配のしくみを利用してサービスに生かしている図書館もある。本市立図書館では、有料宅配サービスと来館困難な介護者、被介護者、0歳児の子を持つ母には無料での宅配サービスを行っている。
- RFID（ICタグ）による自動貸出、自動化書庫、プライバシーの保護。⇒ルーチンワークの省略化。近隣では高槻市などがある程度進めている。

図書館と書店の違い

- 書店には新しい本・話題の本が並んでいるが、図書館の棚には並ばない（新しい本や人気の本には予約が多数あるため）。本市では予約の多い本は同じ本を30冊程度までは購入しているが予約が何百件になるものもあり1年以上予約待ちの状態も珍しいことではない。
- 書店は有料、図書館は無料。
- 図書館では、長時間、座り読みも気兼ねなくできる。
- 図書館では新しい本が棚には並びにくいですが、職員はそれだからこそ、できるだけ本の鮮

度をよく見せる工夫をして、利用者に借りたいという気持ちになってもらえるよう演出の努力をしている。

- 図書館は、アメニティ（快適さ）やホスピタリティ（おもてなし）を目指す場所である。
- 図書館では、生活についての本当に役立つ情報の得られる場所、行けば必ず何か知的な刺激がある場所、居心地の良さがあるくつろげる場所になれるよう努力している（挨拶から始まるコミュニケーションも重要。利用者とのフレンドリーな関係性⇒攻撃的なクレームの対策にもなっている）。

質	疑	応	答
---	---	---	---

Q1.ぬいぐるみの図書館おとまり会をするようになったきっかけは

A1.担当の職員が、どうなるか分からないが面白そうだからやってみよう、という素朴な気持ちから始めたと聞いている。（慎重なばかりではなく、勇気と即決力も時には必要なのかも）。

Q2.電子図書について

A2.話題性はあるが、導入するにあたりかなりの経費を要するため、それに見合うような利用者のニーズがないと判断し、見あわせている状態。他市でもそのような状態にある図書館が多いと思われる（導入例としては堺市など）。

Q3.図書館と子どもの家庭教育の関係性について

A3.図書館での「絵本の読み聞かせ」の行事等を皆さんに知って頂けるようになったり、ここ10年の間に、図書館を家庭教育の場にしようという動きが見られるようになったと考える。本市図書館でも、イギリス発である「ブックスタート」を導入。4カ月検診の際に、絵本を保護者と赤ちゃんに楽しんで頂き、その場で選択した絵本を1冊プレゼントするというイベント。本を読むきっかけ作りのお手伝いとなっている。現在では多くの自治体で導入されている。

Q4.図書館を今後、例えば地元の人に対し医療相談や医療情報提供の場として利用することはできないか

A4.実際に行っている図書館はあまり多くないと思われる。宝塚市でも、健康診断イベントや講演などの場として利用できるようコネクション作りをしていかなければならないと思うが、現状はできていない。図書館には、集客力がある、敷居が低い、気軽に相談したりできる等の利点があると思うので、可能であればやっていきたいと考えている。

以上

議事録担当：奥野 清恵